



- 自 学 ・ 自 立
- 思いやり・感謝
- 鍛 錬

恒久平和の実現

校長 小松 進一

— 長崎の鐘 —

8月9日は長崎原爆の日です。長崎市に原爆が投下されてから今年で80年を迎えました。いくつかのテレビ局では数々の特集を組み放映されました。その中で、日本の医学博士で随筆家の永井 隆（1908年～1951年）について知ることができました。（参考資料：長崎市永井隆記念館）

彼は、昭和3（1928）年、長崎医科大学（現長崎大学医学部）に入学。昭和7（1932）年、同大を首席で卒業し、放射線医学の道に進みます。昭和19（1944）年には母校で医学博士となるも、昭和20（1945）年6月、過度の散乱放射線被ばくによる慢性骨髄性白血病を発症、「余命3年」と診断されます。そしてその2か月後の8月9日、長崎医科大学付属医院内にて原爆被爆し、重傷を負うのですが、直後より2か月間にわたり被災者の救護に奔走します。彼の著書『長崎の鐘』には、その時の様子が克明に記されています。

昭和20年8月9日の太陽が、いつものとおり平凡に金比羅山から顔を出し、美しい浦上は、その最後の朝を迎えたのであった。川沿いの平地を埋める各種兵器工場の煙突は白煙を吐き、街道をはさむ商店街のいらかは紫の浪とつらなり、丘の住宅地は家族のまどいを知らず朝餉（あさげ）の煙を上げ、山腹の段々畑はよく茂った藪の上に露をかがやかせている。東洋一の天主堂では、白いベールをかむった信者の群が、人の世の罪を懺悔（ざんげ）していた。・・・

ぴかり、いきなり光った。大した明るさだっ

た。音は何もしない。地本さんはこわごわ首をもたげた。やった。浦上だ。浦上の天主堂の上あたりに、つい今までなかった大きな白煙の塊が浮かんでいて、それがぐんぐん膨張する。

・・・つい今の今先まで、この窓の下に紫の浪と連なっていた坂本町、岩川町、浜口町はどこへ消えたのか？白く輝く煙をあげていた工場はないではないか？あの湧き上がる青葉に埋まっていた稲佐山は赤ちゃけた岩山とかわっているではないか？夏の緑という緑は木の葉、草の葉一枚残らず姿を消しているではないか？ああ地球は裸になってしまった！

彼は重傷を負いながらも生き残った同僚や学生、看護婦（看護師）とともに次から次へとやってくる被爆者の治療をするのでした。

その後、病床に倒れた隆は、“書く”道を選び43歳でその生涯を閉じるまでに17冊の著書を書き上げるとともに、恒久平和実現を広く訴えました。著作で得た収入の大半を、長崎市の復興や浦上天主堂の再建のため、さらに、愛する浦上の地を再び花咲く丘にしようと、桜の苗木1,200本余り寄付しています。

私は、5月の長崎修学旅行の際に、浦上天主堂から爆心地公園、原爆資料館まで閑静な住宅街の中を歩きました。この静かで平和な街並みは、彼らの活動によって築かれていたのだと思うと、胸が熱くなりました。改めて世界の恒久平和の実現を願う。



浦上天主堂